

31. コロナ禍のお月見

医事万華鏡

9月の恒例行事と言えは「お月見」。お月見と言えは、「中秋の名月」ですが、これは旧暦8月15日に見える月を指します。旧暦8月15日は収穫の時期でもあり、また収穫された里芋を供えるケースが多かったことから、中秋の名月は別名「芋名月」とも呼ばれています。ちなみにその起源は中国とされ、平安時代には「貴族の遊び」として日本に入り、次第に「収穫祭や初穂祭」へと変わっていききました。江戸時代には収穫の喜びを人々と分かち合いながらお月見をする行事として、庶民に広まったと言われています。

そんな月の中でも新月と満月は古より神聖視され、とりわけ満月(Full Moon)に関しては、ヨーロッパ圏の文化で「ルナティック」という言葉があることから、満月の晩に変身する狼男や夢遊病者のように、月は人を狂わせるものでもあるようです。日本でも女性が満月の晩に出歩くと不吉なできごとが起きるといふ伝承があります。もともと、日本人は月に住むウサギやかぐや姫、朧月夜のように奥ゆかしく風情あふれる抒情的なイメージを月に対して持っている方が多いのではないのでしょうか。月に纏わるやまと言葉も多いですし、満月についても「望月」の別称を用いて平

安時代に藤原道長が詠んだ句「この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」は有名です。この句は道長の驕りを示すものとしてあまり評判が宜しくないようですが、ここで使われた満月を待ち望む気持ちを表しているかのような「望月」という言葉は、情緒豊かなイメージを喚起するものであると言えましょう。

ところで、明治の文豪の尾崎紅葉は、その未完の著作『金色夜叉』(1898)にて、満月の精神作用を示唆する有名なフレーズを残しています。本書で主人公の間貫一は、許嫁であった女性が資産家と結婚することになるのを知って激高し、満月の夜に「来年の今月今夜、僕の涙で必ずこの月を曇らして見せる！」と叫び、許しを請う彼女を下駄を履いた足で蹴ったあと、行方をくらましてしまいます。なるほど、満月は人をして衝動的・利那的な行動に駆り立てるようです。実際、統計的にも満月の夜には異常な事件が起こるケースが多いようです。

このように満月は人間心理に影響を及ぼす一方で、内省の機会ももたらしてくれます。とすると、コロナ禍で自粛を余儀なくされている現状は、自身の内面と深く向き合うための良い機会。2021年の中秋の名月である9月21日は、自宅で寛ぎながら秋空に浮かぶ満月を愛でつつ、より一層、心の回復と充実を図る機会とされてはいかがでしょうか。

(JMS主幹・野村元久)

